

幼稚園教育要領の 5 領域における指導法に関する研究 ー特別支援学校学習指導要領自立活動との関連を中心にー

今村 幸子 [認定こども園はなぶさ幼稚園]

肥後 祥治 [鹿児島大学教育学系(障害児教育)]

A Research on teaching methods in the five areas of the National Curriculum Standard for Kindergartens:
Focusing on the relationship with the independence-fostering activities(Jiritsu-Katsudo) of the Special Needs
School Curriculum Guidelines

IMAMURA Sachiko and HIGO Shoji

キーワード：幼稚園教育要領、学習指導要領、特別支援学校、自立活動、指導法

I. 問題の所在

2016 年、日本は障害者権利条約を批准し、障害に関する差別の解消と必要な配慮の提供が明確に求められるようになった。第 24 条では、「一般的な教育制度から排除されないこと」、さらに「効果的な教育を容易にするために必要な支援を一般的な教育制度の下で受けること」を保障することとしている。その理念の実現のために、障害のある子どもの就学先決定の仕組みの改正などが行われてきた。また、発達障害者支援法においては、発達障害の早期発見・支援が求められている。これらのことから、幼稚園は障害のある子どもへ適した教育を提供する役割があるだけでなく、障害を早期に発見し、支援する役割も担っているといえる。2007 年の文部科学省の調査によれば、公立幼稚園の 57.3%が特別支援コーディネーターを指名するなど、特別支援に関する体制は整備されつつある。さらに、2006 年の学校教育法の一部改正では、その第 81 条第 1 項において、幼稚園は子どもの「障害による学習上または生活上の困難を克服するための教育を行う」場の一つとして明記され、特別支援教育における位置づけが格別に重化した。これらのことから、幼稚園教育においては、「障害のある幼児のみならず、教育上特別な支援を必要とする幼児が在籍している可能性があることを前提に」（文部科学省,2018）教育活動を展開することが求められている。

幼稚園の教育内容は、「幼児自身が自発的・能動的に環境と関わりながら、生活の中で状況と関連づけて身につけていくことが重要」（文部科学省,2018）であるという考えに基づいており、伝統的に環境が設定された中での自発的な学びを重視している。そのため、幼稚園教育要領においても望ましい幼児の姿が示され、大人が直接的に教えるというよりは、その姿を引き出すために大人が環境を整えることが前提とされている。しかし、幼児教育の現場では、障害のある子どもや「何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども」（本郷ら,2003）である「気になる子」が多く存在し、環境による働きかけだけでは保育が難しい場合も

少なくない。しかし、実際の指導については、「その多くが担任保育士に委ねられている状況」であり、津田・木村(2014)の研究においては、94.4%の保育士が気になる子どもへの対応について、専門家に自分の関わりが正しいか助言してほしいと答えていた。

これらのことから、幼稚園教育において特別な支援の必要な子どもに対する指導についての手が必要が示される必要性がある。

Ⅱ. 幼稚園教育要領と特別支援教育

1. 幼稚園教育要領における障害のある子どもについての扱い

2019年告示の幼稚園教育要領では、初めて前文が設けられ、その理念が述べられている。その中で、幼稚園は学校教育のはじまりであり、これからの時代に求められる教育を実現するための基礎を培う場であると書かれている。その内容の中には、「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重」することが示されている。また、第1章総則第5として「特別な配慮を必要とする幼児への指導」について取り扱っており、彼らが集団の中で生活することを通して発達していくことを促すために、幼稚園教育においては「①特別支援学校などの助言又は援助②関係機関との連携③個別の教育支援計画の作成の3点が今後の幼児教育におけるインクルーシブ教育の推進には、欠くことのできない要素」(大井,2019)であることを明記している。以前までの幼稚園教育要領における特別な配慮の必要な子どもについての記述は、指導計画作成にあたっての留意点の一項目として、障害のある子どもへの配慮が必要な事、特別支援学校による助言を活用する事に言及していたのみであったことからすれば、2019年告示の幼稚園教育要領における記載内容は、幼児教育において障害のある子どもたちに的確な支援を講じる必要があることを強く示していると考えられる。

2. 幼稚園教育要領と特別支援学校学習指導要領の類似性

国立情報学研究所の運営する CiNii を用いて検索すると、幼稚園教育要領の内容と特別支援学校学習指導要領の自立活動の内容について比較検討した研究は見当たらない。しかし、特別支援学校に在籍する児童生徒の状態によっては、幼稚園段階の子どもと非常によく似た発達段階の子どもが存在すると考えられる。

実際に両者を見てみると、幼稚園教育要領における5領域は、「幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かう」ものであり、これらの「活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」を目指していく柱となるものである。5領域は具体的に「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」である。一方、特別支援学校学習指導要領自立活動編は6区分からなっており、その内容は「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」である。これらの名称を比較してみると、「健康」「人間関係」「環境」の3つの語が共通である。さらに、「コミュニケーション」について、広辞苑では「社会生活を営む人間の間に行われ

る知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」と説明している。この説明を参考にすれば、「コミュニケーション」と「人間関係」、「言葉」は非常に近い意味合いで使われているということが出来る。このことから、幼稚園教育要領と特別支援学校学習指導要領自立活動編の領域区分の内容の検討は、それぞれが対象とする幼児児童生徒の発達段階の近似性を考えると、両者の内容的な隔絶をうめる手がかりを得る試みになると考えられる。

Ⅲ. 目的

本研究では、平成 29 年告示幼稚園教育要領における 5 領域のねらい、内容と平成 30 年告示特別支援学校学習指導要領解説自立活動編の 6 区分における具体的指導内容例・留意点、他の項目との関連例に示された内容を比較し、関連する事項について整理することを通してその関係性を明らかにする。

Ⅳ. 方法

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編の 6 区分において示されている「具体的指導例、留意点」「他の項目との関連例」から、具体的な指導の方法や手立てについての記述を抜き出し、幼稚園教育要領の 5 領域におけるねらい、内容を比較軸として、関連性について検討する。その際、分析表の左枠には幼稚園教育要領のねらい、内容を記載し、右枠には特別支援学校学習指導要領解説自立活動編で示されている具体的な指導方法、手立てについて記載した。

Ⅴ. 結果

1. 幼稚園教育要領の各領域のねらい・内容に関連する自立活動における指導の手立ての数

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編の 6 区分において示されている「具体的指導内容と留意点」「他の項目との関連」の内容から具体的な指導の手立てが書かれている部分を抜き出すと、「健康の保持」11 項目、「環境の把握」33 項目、「心理的な安定」25 項目、「人間関係の形成」21 項目、「身体の動き」13 項目、「コミュニケーション」41 項目の計 144 項目の具体的指導手立てを抜き出す事ができた。その手立てを幼稚園教育要領の 5 領域にける「ねらい」「内容」と照らし合わせ、関連のあるものを整理したものを Table1 に示した。幼稚園教育要領の 5 領域それぞれに関連する指導の手立ては「健康」35 項目、「人間関係」37 項目、「環境」5 項目、「言葉」28 項目、「表現」2 項目であった。また、どこにも関連しないものは 37 項目であった。その内容は、健康や姿勢の保持に関する事、教科学習に関する事、自己理解に関する事、代替コミュニケーションの使用に関する事であった。

Table 1 幼稚園教育要領各領域のねらい・内容に関連する自立活動における指導の手立ての数

領域	ねらい・内容	該当数	
健康	【ねらい】自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする	1	35
	【ねらい】健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身につけ、見通しを持って行動する	1	
	【内容1】先生や友達とふれあい、安定感をもって行動する	4	
	【内容2】色々な遊びの中で十分に体を動かす	6	
	【内容4】様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む	1	
	【内容6】健康な生活リズムを身につける	4	
	【内容7】身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排せつなどの生活に必要な活動を自分でする	5	
	【内容8】幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って生活する	10	
	【内容9】自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動をすすんで行う	3	
人間関係	【ねらい】幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう	2	37
	【ねらい】身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ	1	
	【ねらい】社会生活における望ましい習慣や態度を身につける	5	
	【内容1】先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう	4	
	【内容2】自分で考え、自分で行動する	1	
	【内容4】いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ	2	
	【内容5】友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共有し合う	1	
	【内容6】自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く	18	
	【内容7】友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう	2	
	【内容11】友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする	1	
環境	【ねらい】身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする	1	5
	【ねらい】身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする	1	
	【内容2】生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ	1	
	【内容3】季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く	1	
	【内容9】日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ	1	
言葉	【ねらい】自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう	1	
	【ねらい】人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、	3	

	伝え合う喜びを味わう		28
	【ねらい】日常生活に必要な言葉がわかるようになると共に、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる	2	
	【内容2】したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する	4	
	【内容3】したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないことを尋ねたりする	5	
	【内容4】人の言葉を注意して聞き、相手にわかるように話す	4	
	【内容5】生活の中で必要な言葉がわかり、使う	3	
	【内容7】生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く	1	
	【内容8】色々な体験を通じてイメージや言葉を豊かにする	4	
	【内容10】日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう	1	
表現	【ねらい】感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ	1	2
	【内容4】感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、作ったりなどする	1	
	あてはまらないもの	37	

2. 保育内容「人間関係」のねらい・内容と関連する特別支援学校学習指導要領解説自立活動編に示された指導の手立て

幼稚園教育要領の5領域それぞれのねらい・内容と自立活動の6区分における「具体的指導例、留意点」「他の項目との関連例」の中で示されている指導の手立てとの関連を検討した結果、最も関連項目の多かった保育内容「人間関係」の分析表をTable2に示した。その中でも最も関連事項が多かったのは、「【内容6】自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」であり、伝えるために「絵カードやタブレットを活用する」ことや「簡単なジェスチャーを交える」こと、相手の思いに気付くために「相手の言葉や表情から意図を推測する」こと等の具体的な手立てが示されていた。また、関連の深い項目の学習指導要領上の区分は「人間関係の形成」が4項目、「コミュニケーション」が11項目であり、領域名、区分名の類似性の高いものの関連性が深かった。

Table 2 保育内容「人間関係」のねらい・内容と関連する特別支援学校学習指導要領自立活動編に示された指導の手立て

幼稚園教育要領 ねらい・内容	特別支援学校学習指導要領に示された指導の手立て
【ねらい】幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう	本人が得意な事を生かして課題をやり遂げるように指導し、成功したことを褒めることで自信をもたせたり、自分のよさに気付くことができるようにしたりする（心理的な安定(以下、心)）/本人が容易にできる活動を設定し、成就感を味わうことができるようにして、徐々に自信を回復しながら、自己に肯定的な感情を高めていくこと（人間関係の形成(以下、人)）
【ねらい】身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力して一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ	気持ちが安定し、安心できる状況作りや信頼できる人間関係作りが重要である（コミュニケーション(以下、コ)）
【ねらい】社会生活における望ましい習慣や態度を身につける	状況を理解して適切に対応したり、行動の仕方を身につけたりするための指導をすること（心）/日常的によく使われる友達同士の言い回しや、その意味することが分からないときの尋ね方などを、あらかじめ少人数の集団の中で学習しておくこと（人）/会話の背景を想像したり、実際の場面を活用したりして、どのように行動すべきか、また、相手はどのように受け止めるかなどについて、具体的なやりとりを通して指導すること（人）/自分の顔を相手の声が聞こえてくる方向に向けるようにしたり、相手との距離を意識して声の大きさを調整するなどのコミュニケーションを図るための基本的な指導を行うこと（人）/相手の立場に合わせた言葉遣いや場に応じた声の大きさなど、場面にふさわしい表現方法を身につけることが大切である。なおその際には、実際の生活場面で、状況に応じたコミュニケーションを学ぶことができるような指導を行う（コ）
【内容 1】先生や友達と共に過ごす事の喜びを味わう	身近な教師との関わりから、少しずつ、教師との安定した関係を形成することが大切である。そして、やりとりの方法を大きく変えずに繰り返し指導するなどして、そのやりとりの方法が定着するようにし、相互に関わり合う素地を作る（人）/幼児児童生徒が好むかわりを繰り返し行って、かわる者の存在に気付くことができるようにすることが必要である。このように身近な人と親密な関係を築き、その人との信頼関係を基盤としながら、周囲の人とのやりとりを広げていくようにすること（人）/必要に応じて、友達や周りにいる人に問いかけるなど、積極的に関わろうとする態度や習慣を養うように指導すること（人）/個々の幼児児童生徒の興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、幼児児童生徒が

	<p>楽しんでいる場面に教師が「楽しいね」、「うれしいね」などの言葉をかけたりするなどして、人とやりとりをすることや通じ合う楽しさを感じさせながら、他者との相互的なやりとりの基礎的能力を高める指導をする（コ）</p>
【内容 2】自分で考え、自分で行動する	<p>自分の行動とできごととの因果関係を図示して理解させたり、実現可能なめあての立て方や点検表を活用した振り返りの仕方を学んだりして、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てていくこと（人）</p>
【内容 4】いろいろな遊び、楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ	<p>活動等が消極的になったり、活動から逃避したりすることがあるので、早期から成就感を味わうことができるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えられるように指導する（人）/ものづくりを通して他者から認められ、達成感が得られるようにしたりするなど、意欲的に取り組めるようにする（身体の動き(以下、身))</p>
【内容 5】友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共有し合う	<p>本人の好きな活動において、感情を表したり絵やシンボルマーク等を用いながら、自分や、他者の気持ちを視覚的に理解したり、他者と気持ちの共有を図ったりするような指導を通して、信頼関係を築くこと（人）</p>
【内容 6】自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く	<p>自分を落ち着かせることができる場所に移動して、慣れた別の活動に取り組むなどの経験を積み重ねていながらその興奮を静める方法を知る事や、様々な感情を表した絵カードやメモなどを用いて自分の気持ちを伝えるなどの手段を身につけられるように指導する（心）/多様な手段を活用した積極的なコミュニケーションを通して相手を理解したりすると共に、それまでに得ている情報と照らし合わせたりしながら、周囲の状況や人の気持ち、今後の展開等を推察すること（環境の把握(以下、環)) /対話的な学習を進める際には、選択肢の提示や筆談など様々な学習方法を認めたりするなどして、情緒の安定を図りながら、他者とのやりとりができる場面を増やしていくこと（心）/生活上の様々な場面を想定し、そこでの相手の言葉や表情などから、相手の立場や相手が考えていることなどを推測するような指導を通して、他者と関わる際の具体的な方法を身につける（人）/多様なコミュニケーション手段を場面や相手に応じて適切に選択し、的確に会話の内容を把握する（人）/やりとりの方法を少しずつ増やしていくが、その際、言葉だけでなく、具体物や視覚的な情報も用いてわかりやすくすること（人）/相手の声の抑揚や調子の変化などを聞き分けて、話相手の意図や感情を的確に把握するとともに、その場に応じて適切に行動することができる態度や習慣を養う（人・後半に関連）/体の動きを通して気持ちをコントロールする力を高めること、人と会話するときのルールやマナーを明確にして理解させる事と、会話中に相手の表情を気にかけることなどを指導すること（コ）/日常的に報告の場面を作ることや相手に伝えるための話し方を学習すること（コ・前半に関連）/自分の気持ちを表した絵カードを使ったり、簡単なジェスチャーを交えたりするなど、要求を伝える手段を広げるとともに、人とのやりとりや人と協力</p>

	<p>して遂行するゲームなどをしたりするなど、認知発達や社会性の育成を促す学習などを通して、自分の意図を伝えたり、相手の意図を理解したりして適切なかわりができるように指導する（コ）/発語機能の改善を図るとともに、文字の使用や補助的手段の活用を検討して意思の表出を促す（コ）/周囲の者はそれらの行動が意思の表出や要求を伝達しようとした行為であることを理解すると共に、幼児児童生徒がより望ましい方法で意思や要求を伝えることができるよう指導すること（コ）/ホワイトボードなどを使用して気持ちや考えを書きながら整理していくこと（コ・前半に関連）/双方向のコミュニケーションが成立することを目指して、それに必要な基礎的能力を育てること（コ）/幼児児童生徒がほしい物を要求する場面などで、ふさわしい身振りなどを指導したり、発声を要求の表現となるよう意味づけたりするなど、幼児児童生徒が様々な行動をコミュニケーション手段として活用できるようにすること（コ・前半に関連）/音声だけでなく身振りを状況に応じて活用し、さらに、手話・指文字や文字等を活用して、幼児児童生徒が主体的に自分の意思を表出できるような機会を設ける（コ）/相手の言葉や表情などから、相手の意図を推測するような学習を通して、周囲の状況や他者の感情に配慮した伝え方ができるようにすること（コ）/自分の意思を適切に表現し、相手に基本的な要求を伝えられるように身振りなどを身につけたり、話し言葉を補うために絵カードやメモ、タブレット端末等の機器等を活用できるようにしたりすること（コ・前半に関連）</p>
<p>【内容 7】友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう</p>	<p>良好な人間関係作りを目指して、集団構成を工夫した小集団で、様々な活動を行ったり、十分にコミュニケーションができるようにしたりすること（心）/小集団での話し合い活動や遊び等の取り組みを通して、不安に気付かせたり、他者に感謝したり意見を聞いたりして協調性を養うような指導を行うこと（人）</p>
<p>【内容 11】友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気づき、守ろうとする</p>	<p>ルールを少しずつ段階的に理解できるように指導したり、ロールプレイによって適切な行動を具体的に指導したりすること（人）</p>

3. 幼稚園教育要領 5 領域に関連する指導手立ての数の内訳

Table 3 は、幼稚園教育要領 5 領域のそれぞれに自立活動 6 区分のどの指導手立てが関連していたかについての内訳を示したものである。関連する項目の多い組み合わせは、保育内容「健康」と自立活動「健康の保持」が 10 項目、保育内容「人間関係」と自立活動「人間関係の形成」が 16 項目、保育内容「人間関係」と自立活動「コミュニケーション」が 14 項目、保育内容「言葉」と自立活動「コミュニケーション」が 17 項目であった。これらは、幼稚園教育要領における 5 領域と特別支援学校学習指導要領における 6 区分のそれぞれの名称について、類似性の高い組み合わせであった。

Table 3 幼稚園教育要領 5 領域に関連する指導手立ての数の内訳

幼稚園教育要領 5 領域	特別支援学校学習指導要領自立活動 6 区分						
		健康の保持	環境の把握	心理的な安定	人間関係の形成	身体の動き	コミュニケーション
	健康	9(25.7%)	6(17.1%)	8(22.9%)	3(8.6%)	7(20%)	2(5.7%)
	人間関係	0	1(2.7%)	5(13.5%)	16(43.2%)	1(2.7%)	14(37.8%)
	環境	0	5(100%)	0	0	0	0
	言葉	1(3.6%)	4(14.3%)	5(17.9%)	1(3.6%)	0	17(60.7%)
	表現	0	0	0	0	0	2(100%)
	計	10(9.3%)	16(15.0%)	18(16.8%)	20(18.7%)	8(7.5%)	35(32.7%)

VI. 考察

幼稚園教育要領と特別支援学校学習指導要領自立活動編の内容を比較検討すると、相互に関連した内容を多く見いだすことができた。このことは、特別支援学校が多様な発達段階の子どもを教育する場であり、その中には幼稚園の子どもと同程度の発達段階の子どもも存在することを考えれば当然のことである。日本の幼児教育は、子どもが周囲の環境に働きかける力を利用し、保育者が環境を調整することで望ましい子どもの姿を引き出す過程で発達を促していくという考え方のもとに展開されてきた。この考え方の下で多くの幼児は望ましい姿に成長すると想定されているが、実際の現場では、障害のある子どもや気になる子どもが存在し、従来の環境調整を主とするアプローチだけでは発達を促し、望ましい姿に近づけていくことが困難な場合が少なくない。なぜなら、彼らの中には、環境に目を向けることや、他者との関わりが難しい子どもが存在するからである。このような子どもたちは、従来のアプローチに加えて、大人が直接指導することで人や環境との望ましい関わりを主導し、成長を支える必要があると考える。そのための具体的な方法は幼稚園教育要領には示されていないが、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編においては、子どもへの直接的なアプローチの方法が示されていることが今回の検討を通して明らかになった。このことから、今後は幼稚園における教育の方法を考える際に特別支援学校学習指導要領自立活動編の内容や、それに基づく特別支援学校での実践を参考にすることが有効であると考えられる。

本研究において、幼稚園教育要領 5 領域と特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 6 区分の記載内容の比較検討を行った結果、関連する事項が多く見つかった。一方で、自立活動の指導方法として示されているもので、幼稚園教育要領とは関連しないものもあった。その内容は、自己理解や自分のことについて他者に説明するといった内容が含まれており、それらは幼稚園段階には難しい内容である。しかし、幼い頃から少しずつ意識し身につけていくべき内容であるので、その具体的指導方法は幼児教育にとっても参考になるものであると思われる。また、保育内容「環境」と自立活動「環境の把握」における記載内容は関連する部分が少なかった。このことは保育内容「環境」

では、自然やその中の生命についての内容を扱っており、自立活動「環境の把握」では、障害の状態に応じて適した環境を選択することを中心的に扱った内容であるので関連が少なかったと考える。さらに、保育内容「表現」の記載内容に関しては、関連する指導の手立てを見つけることがほとんどできなかった。「表現」の内容が、自立活動よりは教科教育に近い内容である可能性はあるものの、本研究においては細かな内容や関連する教科教育の記載までは検討する事ができなかった。今後教科教育の記載内容までの検討を行い、「表現」に関する具体的な指導の手立てを検討する事が必要であると考えられる。

参考文献

- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子(2003)保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査,発達障害研究,25(1),50-61
- 久保山茂樹・斉藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳(2009)「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査ー幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言ー,国立特別支援教育総合研究所研究紀要 36,55-76
- 文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説自立活動編
- 文部科学省(2018)幼稚園教育要領解説
- 大井靖(2019)幼児教育における特別支援教育のあり方ー発達障害への早期対応を考えるー,障害児教育実践の研究 29,80-90
- 園山繁樹・藤原あや(2017)幼児期のインクルーシブ教育・保育に関する一考察ー「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」記載事項の変遷を中心にー,人間と文化 221-226
- 津田朗子・木村留美子(2014)保育所における発達障害の早期発見・早期介入を阻害する要因の検討ー「気になる子ども」に対する保育士の認識と支援体制からー,金大医保つるま保健学会誌 38(2),25-33
- 渡辺顕一郎・田中尚樹(2014)発達障害児に対する「気になる段階」からの支援ー就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討ー,日本福祉大学子ども発達学論集 6,31-40
- 吉田はるか・尾崎啓子・細淵富夫(2008)幼稚園教諭を対象にした保育現場における軽度発達障害の意識調査に関する研究,埼玉大学紀要教育学部 57(1),159-165